

改訂版

異文化

コミュニケーションの

A to Z

国から
理論と実践の両面からわかる

小坂貴志

Takashi Kosaka

研究社

改訂版

異文化

コミュニケーションの

A to Z

理論と実践の両面からわかる

小坂貴志

Takashi Kosaka

研究社

はじめに

初版を発行してから、早いもので10年が経ちました。「10年一昔」とはよく言ったもので、社会状況や異文化コミュニケーション研究そのものも大きく揺れ動いた10年でした。異文化コミュニケーションが扱ってきた国・地域・人種別などのパターン化は、本質主義だとして批判を浴びました。ただし、「多文化コミュニケーション」、「グローバルコミュニケーション」などの用語が登場しつつある一方で、相変わらず「異文化コミュニケーション」の言葉は使われ続けています。

「多文化共生」にしる「グローバル化」にしる、それぞれに固有の問題を抱えています。前者は、多文化が融合するのではなく、孤立する状況を生み出してしまい、後者は、資本至上主義で（いわゆる国別）文化の独自性が失われるリスクを背負っているからです。本質主義だと批判に関しては、それを反省点として真摯に受け止めつつ、国別傾向として全体をつかむための材料とする以外に、個別の研究者が新たな視点を導入して、個人をも範疇に入れた文化（生成）理解のための枠組み作りを模索しています。

異文化コミュニケーション研究以上に、様変わりしているのは世界の社会状況です。世界を飲み込む勢いのグローバル化、ISIL（「イスラム国」）をはじめとする過激派組織による無差別テロや個人による自爆テロ、シリアに代表される内紛、北朝鮮による威嚇、サイバーテロなど、脅威の例をあげるだけでもきりがありません。初版では、著者のアメリカ在住時の経験について冒頭で語りましたが、10年の時が流れ、異文化コミュニケーションの例として日米コミュニケーションだけに例を頼るのは心もとないと感じていました。しかしそれと時を同じくして、2016年のアメリカ大統領選をきっかけに、いかにアメリカ（トランプ大統領？）が、現代にあっても予想できない動きをみせる国であるかが証明されつつあり、初版での在米経験の語りを削除してしまったことを今さらながらに後悔しています。そのかわり、今回の改訂では、新たな付録としてクリティカル・インシデントを増やし、多様な地域性も意識したインシデントを紹介しています。各章の内容に合致したインシデントのほか、プロトコル（異文化コミュニケーションのマナー）学習に役立つインシデントをお楽しみください。